

## 中国・山西省における戦争記憶

### War Memories of Sino-Japanese War II in Shanxi Province China.

伊香俊哉・村上研一・高英月

Toshiya IKO・Kenichi MURAKAMI・Eigetsu KOU

#### はじめに

本稿は本大学の大学院共同研究および学術研究として一昨年度に実施した中国山西駐屯元日本兵への聞き取り調査とそれを踏まえた現地調査の継続として、昨2012年度に山西省で実施したヒアリング調査に基づくものである。山西省は日中戦争期に「三光」と中国側から名付けられた日本軍の燼滅作戦が展開された地域であった。これらの作戦に参加した日本軍将兵のなかで、戦後に戦犯として中国（中華人民共和国）に収監されていた軍人は、自らの加害行為について詳細に記した自筆供述書を残している。当初調査はそれら供述書で日本軍の加害行為があったとされる地域から太原・忻州・平原・崞県・寧武などを選んで実施する方針であったが、調査に入る手がかりを得難かったため、調査は盂県と寿陽県で実施することとなった。現地側とのコーディネイトを及び通訳を担当いただいたのは山西大学の趙金貴先生であったが、より直接的に現地で聞き取りの対象者を捜していただいたのは張双兵先生であった。このお二人は以前日本の弁護士・研究者が盂県での性暴力被害調査をおこなった際に協力をされた方々であり、その関係で今回の盂県方面での調査が実現したのである<sup>(1)</sup>。

1937年7月に日中戦争が開始されたあと、1937年末には日本軍第1軍隷下の第20師団と第109師団が盂県・寿陽方面に侵入した。1938年1月に日本軍は盂県城を占領した。その後占領体制への移行がなされ、この地域は独立混成第4旅と独立歩兵第14大隊が各地に拠点をおくこととなった。こうした日本軍の侵攻・占領に対しては八路軍とさまざまな民兵組織がゲリラ的闘争を展開した。

治安確保を図ろうとする日本軍は掃討作戦や無人区化を展開し、その中で一般住民が殺害される「惨案」が多数発生した。盂県史志編纂委員会編『盂県志』（北京、方志出版社、1995年）には22件の惨案が記されており、寿陽県志編纂委員会編『寿陽県志』（太原、山西人民出版社、1989年）には12件の惨案が記されている。今回私たちはそれらの中でも比較的被害者数が多かった惨案について知る人から証言を得ることを試みた。

本稿の課題は、今回の聞き取り調査の内容を整理し、日中戦争（抗日戦争）期の記憶がどのように人々の中に残っているのかを明らかにした上で、中国における戦争記憶の伝承のあり方について考察を加えることである。なお〔 〕は伊香による捕捉である。

## I. ヒアリング記録

### 1. 8月17日ヒアリング

#### ① 張双兵ヒアリング

2012年8月16日に太原の新紀元大酒店入りした伊香・村上・高は、趙先生とスケジュールを確認し、翌17日から調査を開始した。最初に訪ねたのは現地のコーディネートを担当いただいた張双兵先生<sup>(2)</sup>である。

張双兵先生は、1953年旧暦2月25日生まれで、先祖代々、孟県西潘郷羊泉村に暮らし、自身も同村の生まれ、育ちである。1971年に西煙鎮高校を卒業し、同年から小学校教諭となった。当時は文革中で大学に進学できない情勢だったので、高校を卒業して小学校教諭となった。1971年以来、羊泉村小学校のような小さな村の学校に勤務してきたが、1982年に高庄村小学校に転勤した。

#### 【戦争被害者との対面】

張先生がこの地域の戦争被害者に会ったのは1982年であった。その年の秋、体育の校外授業中、張先生は一人の老婆が農作業をしているところに行きあたった。その時はもう収穫末期で、他の家の畑では男たちによって既に収穫が大方終わっていたのに、その女性は作物が残る畑で難儀そうに収穫作業をしていた。その姿が気になった張先生は、村人に尋ね、その女性が候冬娥という名で、当時は脳梗塞を患うなど体が弱かったが、若いころは「盖山西（山西省の中で最も美しい）」とあだ名されたほどの美人で、日本軍侵略時に進圭社の日本軍トーチカに連行されて性暴力を受けた被害者であることを聞いた。

同年冬、小学校の定期試験の時、張先生は南羊頭村に試験監督として派遣され、村人の趙味さんの家に泊まることとなった。張先生は、趙さんから、1943年に日本に連行され、群馬県の発電所建設に従事させられた体験を聞いた。張先生自身は戦争体験はなかったが、こうした候さん、趙さんの話に大変なショックを受け、戦時中のことへの関心を高めた。

張先生が候冬娥の体験を始めて聞いたのは1992年頃だった。候さんははじめ、トーチカに連行されたことは語ったが、性暴力被害に関する具体的な話はしなかった。張先生は度々候さんを訪ね、信頼関係が形成された後に、具体的な性暴力被害の話をしてもらえるようになった。当時、候さんは夫の李五白さんと、夫の兄と3人ぐらしで子どもはいなかった。なお、夫の兄は強制連行被害者でもあった。当時70代の候さんは、張先生といっしょに1箱4角の安い煙草を吸いながら話をした。候さんは、自分の恨み、自分の身にふりかかった苦しい経験は心の奥底に隠そうとしても隠しきれず、誰かに訴えたいという思いを抱いていた。そして、候さんは日常的に被害を受けた経験を思い出すと語り、話す途中で何度も泣きだした。話し続けるというよりもしばらく激しく泣いた後で、ようやく落ち着きを取り戻して話し始めるといった感じだった。張先生の聞き取りでは、夫の李さん、その兄も一緒だったが、夫も妻の横でともに語ってくれた。なお、夫は妻の受けた性暴力被害については初めて聞いた、とその場では言っていたが、張先生には少しは知っていたように感じられたという。

### 【戦後補償裁判】

〔この地域の性暴力被害をめぐっては、1992年に東京で開かれた「慰安婦」問題の国際公聴会で万愛花さんが自らの被害を訴えた。1995年には山西省の元「慰安婦」4名が原告となり中国人「慰安婦」損害賠償請求訴訟が東京地裁へ提訴された。これが中国人性暴力被害の第1次訴訟であったが、翌1996年には続いて第2次訴訟がなされた。また同年から日本の弁護士らによる山西省現地での聞き取り調査が開始され、1998年には万愛花さんらを原告とする山西省性暴力被害者損害賠償請求訴訟が東京地裁へ提訴された。張先生はこうした一連の活動を現地側から支え続けた。山西省性暴力被害者損害賠償請求訴訟は2005年11月18日に最高裁で敗訴が確定し、第1次・第2次訴訟も2007年4月27日に最高裁で敗訴が確定した。〕

裁判の結果について張先生は、裁判自体は結局は敗訴してしまったが、被害女性が被害事実や恨みを表明でき、「性暴力被害＝不名誉」という以前からの村人たちの認識を払拭できたという成果があったと思うと、その意義を語った。ただ、敗訴については口惜しい、あきらめきれないという気持ちが強いとも語った。

張先生はこうした活動に完全にボランティアとして取り組んできたという。張先生をそこまで駆り立てた思いとは何だったのか尋ねた。張先生は、中国で「公道」と言われる正義を貫きたいということ、また被害者の尊厳を守り、日本の若い世代に二度と戦争をしてはならないと伝えたいとことだと語った。

また張先生は、村人たちは、自分たちは軍人でないただの民衆なのだから、戦争被害に対する損害賠償をしてほしいという思いを持っているとも語った。この地域の被害は性暴力に限られたわけではなかった。この地域は八路軍が強く、陽泉市に駐屯する日本軍の独立混成第4旅団によって無人区とされ、日本軍は10～20人規模の分屯隊をあちこちに配置する高度分散配置態勢をとった。そういう状況の中で、住民の虐殺も起きた。張先生は、そうした県内の虐殺現場ほとんどに足を運んだ。現在村々では男性の生存者は少なく、85歳以上の体験者の女性が存命している場合でも、家庭内にこもっていて人とのつながりも少なく、あまり語り継がれていないという。

### ② 馮林如ヒアリング

今回、われわれはそのような虐殺被害について語れる人々を張先生の手配によって訪ねることとなった。張先生の話聞き終えた私たちは、午後と同じ南羊園村に生まれ住む馮林如さん（男性、1927年旧暦4月26日生、卯年、数え86歳）を訪ねた。

### 【日本軍の目撃】

馮さんは、子供の頃学校に通ったことはなく、ずっと村で生活していた。馮さんが12～13歳の1938か39年頃日本の中国侵略を知った。当時の家族構成は、祖父と父母、弟4人と妹2人で、馮さんは7人兄弟の一番上だった。馮さんの村の近所に日本軍が来たのは、馮さんが15歳の頃で、馮さん自身も一度、县城から来た日本兵の討伐隊を2回見たことがある。一度目は大人数、二度目は10数人の少人数だった。

### 【無人区化】

1943年、馮さんの村を含めて付近が無人区とされ、日本軍に焼き払われた。無人区とされた時、日本軍は「無人区にしる」と命令しただけで、集住命令は出さずに、勝手に

どこへでも行くように言われた。この地域は全て無人区とされたが、南羊圏村が一番ひどかった。日本軍の狙いは、無人区にして村を八路軍に利用させないことだったように思う。無人区化前の村には八路軍の情報要員がいて、周囲の情報を八路軍上層部に伝えていたようだった。八路軍自体は立ち寄る程度で、駐屯していたわけではなかった。進圭社管区に入っていた隣村の羊泉村はそれほどひどくは破壊されなかった。

馮さん自身は村が無人区化される布告は見たことはなかったが、子どもだった馮さんも含めて村人たちは無人区化されることを知っていて、日本軍が来る前に隣村の羊泉村に避難した。羊泉村に避難中、南羊圏村が燃やされているのが見えたが、病気を患っていた馮さんの祖父は村が焼ける炎を見てショックで死んだという。その後、村に帰った村人たちは、村が破壊されたのを目の当たりにした。馮さんたち家族も、村に戻って悲惨な村の状況を見た。家族は皆、涙を流した。家を建て直すにも金はなく、食糧は少ないのに政府に税を納めなければならないので生活は苦しかった。その後も家族は日本軍に対する恨みを抱いていた。日本軍が来ると農民に悪さをするので嫌だったが、八路軍が来るのは歓迎していた。

馮さん家族は、倉庫を含めて合計 22 部屋のある、石で造ったヤオトンづくりの四方院 2 か所に住んでいたが、日本軍の「三光」により焼き払われた。石造りのヤオトンは、火を放たれ、石の部分は石臼を使ってたたき壊されていた。村中ほんどの民家が焼き尽くされた。この「三光」の時、村人は全員逃げ出した。その後、村人たちは隣村の羊泉村に逃げ、そこの村人から部屋を借りて 1 年間ほど暮らした。羊泉村に仮住まいのあいだも、南羊圏村の村民たちは食べて行くために、無人区とされた南羊圏村の畑にこっそり戻り、野良仕事をしていた。

無人区とされたが、日本軍は常に監視しているわけではなかったもので、三光から 1 年後、村人は南羊圏村に戻って、家を再建した。ただ、その後も孟县县城や進圭社などから日本軍が討伐にやってきたので、安心できなかった。1 度は、县城から討伐に来た日本軍が村の羊を奪い、大東洼という場所で焼いて食べた。村人たちは、日本軍が残した羊を取り戻しにいった。

### 【八路軍】

その後、八路軍の拡大運動があり、1944 年旧暦 7 月に新兵募集に応募して数え 17 歳の時に馮さんは八路軍に入隊した。無人区化前の村には、大部隊の八路軍が来たことはなかったが、区公所（区小隊）など少人数の部隊が立ち寄ったことがある。南羊圏村のように山に接した村は八路軍に重視され、区公所の八路軍の兵士が宿泊することもあった。村人と交流した八路軍の人は悪いことはしなかった。

馮さんが八路軍に入隊した 1944 年旧暦 7 月、南羊圏村からは馮さんともう 1 人が入隊した。その人は八路軍内で評判が悪かったため、しばらくしてから村に戻された。入隊後の馮さんは、孟县县城東側にあった上社で日本軍と戦ったことがある。日本軍との戦闘は遊撃線で、弱そうな日本軍のトーチカを攻撃し、強力な日本軍が現れれば逃げた。馮さんが参加した上社のトーチカへの攻撃は 120 人位の中隊規模で行った。ただゲリラ戦で、無理な攻撃はしなかったのも、八路軍に大きな損害は出なかった。八路軍にいたとき、馮さんは、日本軍との戦闘による戦死者を見たことはなかった。馮さんの中隊は、戦闘部隊でなくゲリラ戦用部隊なので損失が小さかったようだ。戦闘部隊の様子について

て馮さんはよく知らない。

八路軍は規律がしっかりしていた。武器は漢陽で製造された7.9歩兵銃〔7.92mm勃然式軽機銃のことか〕で、中隊の人数分揃っていた。馮さんの中隊では日本軍から奪った武器は少なかったが、見たことはある。ただ、日本軍の武器を使うことはなかった。

八路軍の食事は階級にかかわらず同じだったが、連隊長以上は違う食事だった。八路軍には給料もあり、1月に2元、粟で計算された。当時の2元は大金ではなく、歯磨きを買える程度だった。ただ1947年に除隊した時には、500kgにもなる大量の粟を持ち帰った。

八路軍内では希望すれば読み書きを教えてもらえた。八路軍内の教育は銃剣、射撃などの軍事教育のほか、政治教育も行われた。政治教育の教材は『晋察冀新報〔日報か〕』などの新聞を教材に、幹部レベルの知識人が読んで教育した。勉強する意欲があれば、ペンやノートを買ってくれて勉強できた。八路軍内では、毛沢東によって指示された規律についても教育された。捕虜虐待の禁止や、捕虜のポケットの中の物は私有財産なので奪ってはいけない、などと教えられた。

#### 【記憶の伝承】

馮さんの家族は、解放後、父が45歳で亡くなり、母は1968年に亡くなった。日本軍による被害が大きかったため、戦後も父母は日本軍の悪さをよく話していた。馮さん自身、現在も日本兵が悪いことをしたということを周囲の人たちに話している。

## 2. 8月18日ヒアリング

### ① 楊有山ヒアリング

翌8月18日、午前中は盂県西潘郷銅炉村にて聞き取り調査を行った。

この日は最初に楊有山さん（男性・数え81歳、酉年。1933年旧暦5月6日生まれ）から話を聞いた。楊さんの家族は、父母と兄2人（17歳上・14歳上）、妹の6人で、戦争中、一家は隣の銅炉村で農業を営んでいた。

#### 【日本軍の侵攻】

日本の侵略について、1937年の盧溝橋事件については伝聞した。その後、3～4年経った1940年頃に日本軍が近隣にも進出してきた。

ある秋の日に、盂県上社方面の黄安から日本軍が通りかかり、この村で水を飲んで通過していった。その時、村の大人たちが「洋人が来た、早く逃げろ」と言ったので、楊さんは母と一緒に畑へ逃げた。当時の上卦頭村は戸数60位、人口360人くらいで、日本軍が来たのはこの時が初めてだったので、皆あわてて逃げだしたが、好奇心から日本軍の様子を村近くから眺めていた子どもたちもおり、中には村に残って隠れて様子を見ていた人もいた。村の中では、事前に日本軍が来ることが分かっていたので、5～6人の老人が寺で湯を沸かしていて、長旅をしてきた洋人のために用意していて、日本兵たちはそれを飲んで行った。日章旗をかかげて100～200人の日本兵が通って行ったが、皆、日本軍のカーキ色の軍帽と軍服を着ていて、中国人の保安隊は含まれていなかったようだ。日本軍のカーキ色の軍服はとても丈夫で、桑の木でできている服だから丈夫なのだと言っていた。なお村には、日本からの種で植えた桑の木があり、季節になるとおいしい実を付けた。日本兵たちは2時間程度村に滞在した後、村から道を下って

行軍して行ってしまったので、村人たちは村に戻った。

その後、この地域では1941年9月以後、進圭社、西煙など大きい村に日本軍が駐屯するようになった。西潘郷の中で駐屯地があったのは進圭社だけだったが、1939年以來の駐屯地だった上社の黄安から日本軍が派遣されてきたようだった。

### 【上朴頭村惨案・趙家庄惨案】

〔上朴頭村惨案と趙家庄惨案については孟県史志編纂委員会編『孟県史』(434頁)で次のように述べられている。1944年8月16日、西煙・河東に駐屯する日本軍が、石家庄・銅炉・西潘等の村で捕らえた民衆20名を上朴頭村廟内に押し込めて、ガソリンを体にかけて全部焼死させた。午後、また趙家庄を包圍して、捕まえた25人の村民が惨殺された。ある者は目をえぐられ舌を切られ、ある者は手足を切られ、ある者は腹を切り裂かれ、ある者は数人一緒に石を縛り付けられ井戸の中に投げ込まれた。焼却された民家は246間、51頭の牛と240匹余の羊が掠奪された。〕

1944年の旧暦4月に進圭社から西煙鎮に進駐していた日本軍が、旧暦6月28日〔新暦8月16日〕に進圭社へ戻る途中、この地域に戻ってきた。この時、日本軍主体の作戦か、保安隊からの情報に基づいて行われたのかは不明であるが、この地域で討伐が行われ、上朴頭村で虐殺事件が起きた。雨の日だったが、日本兵たちは突然、銅炉村を包圍して、村の外から射撃してきて、村人たちは逃げ出したが240人くらいが逃げ遅れて捕まった。楊さんは当時、数え12歳、銅炉村内の学校近くの寺にいたが、急いで家に逃げ帰った。日本軍が事前に何の知らせもなく攻撃してきたため、村人は村の外へ逃げるのができなかった。楊さんの家には、2人の日本兵が銃剣を持ってやって来たところ、笑顔を浮かべた父が食事を出してもてなそうとしたが、日本兵は銃剣で父と兄を外へ追い立てた。父と兄2人は抵抗できずに、隣家の逃げ遅れた男性も含めて村の成人男性が集められて、上朴頭村へと連行された。この時、母はただただ泣くばかりだった。上朴頭村に集められたこの240人の中には、石家庄、銅炉村の人たちも含まれていた。日本軍は、進圭社、西煙の両分遣隊長に率いられていて、西煙分遣隊長は捕まえた約240人を機関銃で皆殺しにするよう主張したが、進圭社分遣隊長が女性と子供は可哀そうだと主張し、大人の男性のみ約24人が殺され、女性と子供は生き残った。

楊さんは、銅炉村へ上朴頭村から逃げてきた人から、楊さんの父と兄も殺されたことを伝え聞いた。虐殺後、日本軍が上朴頭村から去ってから、楊さんたち銅炉村の子どもたちは現場を見に行ったら、20数人の大人が部屋に閉じ込められて焼き殺されていた。楊さんの兄1人(下の兄・当時26歳)と陳仁和は「焼き殺されたくない」と言って部屋に入ることを拒んだため、部屋の外で銃剣で殺されたと聞いた。他の人たちは部屋で焼き殺されたと聞いた。楊さんの父(当時62歳)と上の兄(当時29歳)もこの部屋で焼き殺された。楊さんの母は纏足をしていて遠くへ歩けなかったため、銅炉村に残っていた。

虐殺現場は四方を壁で囲まれた大きな寺の庭で、この庭に楊さんの兄ともう1人、陳仁和という男性が後ろ手に縛られたまま刺殺されていた。陳仁和は東潘郷に住む羊飼いで、放牧中に捕まったようだ。寺の西側に、「西禅房」という名の3間つづきの部屋の中に、焼き殺された人たちが3・4段に折り重なって死んでいた。人々は後ろ手に縛られ、ドアの柱にも縛りつけられており、死体の山積みが一番上の人は黒こげ、下の方の人は焼け

ずに窒息死していた。父も兄の死体も下層だったので顔が判別できたが、父は天井から落ちた石の下敷きとなった足が折れていた。楊さんは、父と兄2人の死体を見て涙が止まらなかったが、いくら泣いても3人は帰ってこない。村に帰って母に知らせた。この後、楊さん一家は纏足をしていた49歳の母と9歳の妹だけが残され、生活が大変苦しくなった。

銅炉村の住民は楊家と王家のふたつの大家族から構成されていたが、殺された村人は12～13人、楊家では5人の男性が殺された。当時、大家族の楊家は100人ほどで構成されていたが、この楊家の男たちが遺体処理をしてくれた。父と兄2人の遺体は、当日中に村に運ばれ、あらかじめ用意されていた棺2人分（父母2人分を用意してあった）ともうひとつ棺を買って土葬した。楊家の犠牲者5人は一緒に埋葬され、埋葬時にはラッパなどを使ったこの地方の民間風習で葬儀が行われた。

この虐殺事件の後、日本軍からの被害はなかった。父と兄たちを失った後、楊さんが16歳で学校を卒業し、他の大人たちと一緒に仕事をした。楊さんが学校を卒業するまでの一家は、危うく乞食になりそうなくらい生活は苦しかったが、楊一族の人々が面倒をみてくれたおかげで何とか生活できた。生活が苦しかった時には、木の皮、山野草、木の芽を食べて飢えをしのいだ。楊さんの体は丈夫で、13歳のときに崖から落ち、100日間も寝たきりの生活を送ったが、その後、元気になった。野良仕事は楊一族の大人が代わってやってくれたが、子どもの楊さんも石取りなど、母も草取りなどの軽作業を行った。また、収穫の時も親戚が手伝ってくれた。

#### 【記憶の継承】

虐殺事件の時49歳だった母は、82歳くらいになった1977年頃まで存命だった。母は、昔のことを子どもたちによく話したが、話し出すとすぐに泣き出した。ただ、話し出すと泣くばかりだったので、次第に話さないようになった。事件後2～3年間、母は精神状態が不安定でいつも泣いてばかりで家庭内も暗かったが、その後は精神状態も安定するようになった。

楊さん自身も虐殺事件の体験をよく思い出した。楊さんは結婚して子育て中、子どもが小さいときに虐殺された楊さんの父の話子どもたちに話したこともあった。ただ、子育てが忙しくなって、楊さん自身も昔のことをあまり話したくなくなり、子どもたちも話を聞きたくないようになってから、戦争のことはあまり思い出さなくなった。

虐殺で殺された24人ほどの人たちは皆、正直な農民ばかりで、野良仕事をしていただけの人たちだった。金持ちの地主に雇われていた小作人も多かった。殺された中には、柳家溝という村から来ていた父親とその12歳位の息子もいた。楊さんの父や兄たちは八路軍とは無関係で、八路軍が銅炉村に来たこともなかった。あるいは八路軍関係者が来ていたにしても、大人数ではなく少人数の秘密黨員がこっそり来て、村人と話をした程度だったと思う。

#### ② 李吉元・李愛鎖・梁来拴ヒアリング

18日の午後は盂県西潘郷趙家庄村に行って3人の男性から同席で話を聞いた。李吉元さんは数え76歳、子<sup>ママ</sup>歳・1937年生まれで、日本軍が来た1944年8月16日には数え7歳だった。李愛鎖さんは、数え75歳、寅<sup>ママ</sup>歳・1939年生まれで、同数え6歳だった。梁来拴さんは、

76歳・1937年生まれである。3人はともにこの村の生まれ、育ちである。

李愛鎖さんの一家で殺された人はいないが、父が西煙トーチカに連行され、釈放には金を要求された。叔母の結納金の銀50元を身代金として支払い、釈放された。

### 【趙家庄村惨案】

李吉元さんは、1944年8月16日の虐殺事件の時幼かったのであまり覚えていないが、家族では兄と兄嫁が殺された。隣家では、3人が首を紐でしばられ、井戸に投げ込まれて殺された。当時の家族構成は父とその兄弟、この3人兄弟にそれぞれの嫁と、5～6人ずつの子どもがいて10数人の大家族だった。

事件の数日前、日本軍討伐の情報が入ったため、皆近くの山に逃げた。数日間、日本軍が来なかったため、腹が減った人の中には食事のため村に戻った人もいた。1944年8月16日の午後1時ころ、日本軍が村にやってきた。李さんは山に隠れてはっきり見えなかったが、あわてた村人の叫び声が聞こえた。李さんの家では、炊事に村に戻っていた兄と兄嫁が日本軍に連行された。日本軍は燼滅戦を展開し、村で飼っていた羊は全て奪われた。日本軍は村を包囲し、村の中にいた人々は全員虐殺された。梁さんの叔父は日本軍が来るのに気付いて靴もはかずに逃げたところ、日本軍に射撃されたが、山の中に逃げ切った。梁さん自身はズボンもはかずに逃げたので、山の中では袋をズボン代わりにした。牛までも怖がって逃げだす騒ぎだった。

村に来た日本軍は、保安隊も含めて約500人の大隊規模の部隊だったようで、隣村から約1キロも日本兵の隊列が続いていた。当時、孟県には大隊規模の日本軍が駐屯しており、県城には中隊規模の約200人の日本兵と約300人の保安隊が駐屯していた。日本軍の道案内をさせられた梁さんの兄の話では、保安隊は黒い脚絆で、村出身の保安隊員も1人含まれていた。この保安隊員は解放後に、県城で処刑された。1944年8月中に日本軍はこの地域から撤退したようだが、撤退前に残虐行為に及んだようだ。日本軍は機関銃や大砲も持っていたが、砲撃や射撃はしなかった。

討伐された大きな村に置かれていた共産党委員会と区公所がこの小さい村に移されてきて、共産党幹部が住んでいた。共産党員たちは、いろいろな村を転々と逃げていたようだったが、この村に長く滞在していて、私の家の大きな建物も党に利用された。討伐後は区公所は山の中に隠れ、村には住まなくなった。共産党幹部たちは運よく虐殺を逃れ、逃げる事ができた。死体処理などは村人自身が行った。

1944年8月16日の趙家莊の虐殺の後、日本軍は上扑頭村の方へ引き上げたが、梁さんの兄は日本軍の道案内として連れて行かれた。兄は夜、無事に逃げて帰って来た。事件当日、日本軍が引き揚げた後、大人たちは同夜に村に戻り、女性と子どもは翌日に村へ帰った。虐殺事件の翌日、山の頂上で見張りをしていた村人からの知らせによって、日本軍が上扑頭村方面へ向かったという話を聞いた後、村人たちは村に戻ってきた。

李吉元さんの家の井戸の中には、捕まった村人たちが子どもも含めて10数人も沈められて殺されていた。李吉元さんの兄の死体は、井戸の中で見つかったが、耳が切り落とされていた。井戸の中の若い女性の死体には、女性器にニンジンが突き込まれていた。なお、この井戸も、またこの時住んでいた家も現在も残されている。もうひとつ、村はずれの井戸の中にも10数人の死体があった。井戸の中の死体は女性6人と多くの子どもが含まれていた。子どもは首を紐でしばられ、石にくくりつけてあった。「村の恥」だ



からあまり言いたくはないが、大人の女性は強姦されたようで裸にされていた。村内のある家の庭では、地下の食糧貯蔵庫の中に閉じ込められた10人位の大人の村人たちが、壁を壊されて生き埋めにされて殺されていた。当時、村には300人近い人口があったが、29人が殺された。家屋もすべて破壊され、燃やされ、牛、羊などもすべて殺された。破壊された村は川の西側にあったが、戦後、川の東側に新しい村を作った。村人たちは、死体を布でつつんで、家族の墓に土葬した。しかし、この村にいた漢奸の1人は虐殺事件の時に村を離れていたが、日本軍に殺されたこの漢奸の弟は一族の墓に入れてもらえなかった。

#### 【焼却後の生活難】

虐殺事件後もたまたま日本軍が通過し、村の集落は焼き払われたため、数年間はこの村は消滅していた。1944年中に耕作をはじめた人もいたが、多くの人は翌1945年春から耕作を再開した。村を焼かれた村人たちは、食べ物も失ったので親類を頼って、親戚のいる村に移り住み、そこで稼いで財産を作ってから村を再建した。李吉元さんの家族は、虐殺事件後に叔父の家族とともに、叔父の妻の実家のある高庄村と西潘郷の間にある侯羅湾という小さな村に移り住んだ。避難先では、親類の世話で生活させてもらったので肩身が狭かった。焼かれた家の再建は経済的に大変厳しかった。避難先でも食糧が不足したため、元の村の耕地に作付しなければならなかった。李吉元さんの父は避難先の農家を手伝ったが、なかなかお金がたまらず、何年もたつてようやくお金をためて家を再建した。事件後、村を棄てて他の村に移り住んだ人もいた。村では、石造りの家は破壊されていたが、ヤオトンは再利用できたので、吉元さん一家は残っていたヤオトンを利用して家を再建した。日本軍は農機具の木製部分を焼いてしまっていて使えなくなっており、牛や羊も殺されたため、人が牛の代わりに耕作するなど耕作作業も大変だった。この村では、農民は皆自作農で、金持ちは良い土地を、貧農はやせた土地を保有していた。

#### 【盧辛莊討伐】

梁さんの父は、虐殺事件より前の1943年、梁さんが数え5歳の時に、村から西側に山を越えたところにある盧辛莊で殺された。梁さんの父は共産党員で、保安隊員となっていた漢奸4人を監禁していたが、このうち1人が脱走して日本軍に報告した。その後、日本軍が盧辛莊を討伐し、梁さんの父を含めて6人の共産党員を殺害した。漢奸になったのはやくざや不良で、村々で評判が悪く村に住めなくなって日本軍に協力する人が多かった。父が殺された後、母は、14歳の兄、5歳の梁さんなど4人の子どもを連れて再婚した。再婚相手は独身で、後に1人子どもが生まれた。義父は、梁さんの実の父と違い、梁さんたちをののしったり殴ったりした。もっとも農村では実の父でも殴る人はいたのだが……。盧辛庄の事件について情報が正確に伝わっておらず、母も再婚したため、梁さんの父は革命烈士にはなっていない。

事件後、村は無人数区になったため、その後も戻って来なかった人も多かった。事件以前は栄えていたこの村の繁栄は、戦後は再び蘇ることがなかった。

#### 【記憶の継承】

親兄弟、親しい人たちが殺された村人たちは、お互いに戦争の話をしあい、若い世代にもしっかり伝えてきた。中国のことわざで「妻を奪われたり、親を殺されたりする恨み以上のものはない」というのがある。恨みは子どもや孫に伝えた。皆さん日本人を恨む

ことはないですが、日本政府のことを死ぬまで恨み続ける」と梁さんは言う。また、梁さんは戦犯裁判があったことは知っている。なお梁さんは、貧しくて学校に行けなかった。学校に行っていたら教師になりたかったと語った。

### 3. 8月19日ヒアリング

#### ① 郝控狗ヒアリング

8月19日午前、私たちは孟県東梁郷岑峯村朱家庄を訪れ郝控狗さん（男性・84歳、1928年4月生まれ辰年）から話を聞いた。

戦時中の朱家庄は、住宅100戸ほど、人口500人くらいだった。この他、牛、ロバ、馬など大きな家畜が200頭ほど飼われていた。牛馬は耕作用に利用された。

#### 【略奪】

くわしい年は覚えていないというが、郝さんは数え13～14歳の時、日本軍に捕まり、殴られたことがある。郝さんは牛飼いで、外で放牧中、軍服・鉄帽・銃剣付きの38式歩兵銃を装備した3～4人の日本兵が「牛だ牛だ」と言った後、何か日本語で話しあいながら近づいてきた。日本兵たちは笑いながら郝さんの顔を素手で殴り、牛を奪っていった。郝さんは意識不明となり、牛は老関という寺に持って行かれた。郝さんは意識が戻るとすぐに家に帰り、父に報告した。父は、村にいた日本軍の協力者を介して銀30元を払って、牛を取り戻した。この事件以前にも日本兵が村に来ることがあり、日本軍に協力する村人もいた。日本軍が来ると、村人たちは恐れをなして、家畜など財産をもって山へ逃げた。

#### 【殺害・放火】

郝さんが殴られた年か翌年の旧暦8月19日と12月19日に、日本軍が村に討伐に来て、家屋を燃やし、物を奪っていった。2回の討伐で、この村では8人くらいの村人が殺された。

#### 【日本軍への対処】

村人たちは、村の上の丘の上に、高山哨という見張りを建ており、日本軍が来ると、〔目印〕木を倒したりして村へ連絡を取った。日本軍が来るとの情報が入ると、日本軍のやってくる方角を確認したうえで、家畜や布団などを持って村人たちは山へと逃げた。夜になると見張りも役に立たないので、村人たちはほら穴に隠れた。村に残った人は、通訳の中国人によって「良民」「悪民」と決められ、「悪民」とされた人は殺された。日本兵に遭遇した村人は、牛や羊などを渡して日本兵の機嫌をとった。

#### 【抵抗への仕打ち】

なお、討伐事件の前の5月にも日本軍がにわとりを奪いに来たことがあった。日本兵たちは家に入って物を奪ったが、60代の祖母が抵抗したところ、銃で殴られる、銃剣で着られるなどして大けがをした。

#### 【掃蕩作戦】

8月19日の掃討作戦では、日本軍が家屋を燃やしたが、体が弱く部屋の中に隠れていたおじいさんが1人焼け死んだ。また、もう1人、地下の食糧貯蔵庫に隠れていた56歳くらいの男性も、火のついた草を貯蔵庫に入れられて焼き殺された。また、20代の若い男性2人も犠牲になった。1人は山に逃げる途中で機銃掃射され、射殺された。日本軍に捕まったもう1人の若者は、崖の上から突き落とされて殺された。また、李新寛と

いう妊娠中の女性が子どもを連れて逃げていたが、逃げる途中で日本軍に捕まり、子どもとともに殺された。さらに鄭海全という人の妻で、羊摩寺という村から朱家荘に嫁いでいた20代の女性がいたが、この人は事件の日、羊摩寺の実家に戻っていて、そこで日本軍に殺された。

#### 【村の消滅】

8月の討伐の後、村人は山の奥にヤオトンを作って住み、この村にはだれも住まなくなった。この村は、盩厔西烟鎮の日本軍のトーチカから10キロくらいしかなく、日本軍がしばしばやってくるので、村人たちは恐ろしくて村に住むことはできなかった。8月の討伐後、少し家は残っていたが、12月の討伐で完全に焼き尽くされた。

#### 【他地域の事件の伝聞】

周辺の村での日本軍による虐殺としては、4キロほど離れた羊摩寺で村人が皆殺しになった事件〔1941年1月5日〕の被害が一番大きかった。事件について郝さんは、事件の3～4日後に伝聞した。当日、未明のうちにひそかに日本軍が村を包囲し、「会議をする」と言って村人を集め、機銃掃射で殺害し、死体を黒こげになるまで燃やした。

#### 【八路軍の工作組】

なお、羊摩寺には八路軍自体が駐屯したことはなかったが、八路軍の工作組（区公所より下の組織）が駐在していた。工作組は、村の共産党員村長や共産党協力者と会議を開いたり、協力者に食料調達や兵の募集などの仕事を依頼していた。「治保員」という名称で呼ばれた村長が村人たちから選ばれた。この村では、「良民村長」という日本軍に協力した村長と、八路軍に協力した「党員村長」とがいた。

## 6. 鄭果花・鄭万喜・鄭庭淇ヒアリング

8月19日の午後は同じ盩厔東梁郷岑峯村で鄭果花さん（女性、数え75歳、寅年〔1938年生まれ〕。現地ガイドの閻連生さんの母親）と鄭万喜さん（男性、1940年生まれ、数え73歳）、鄭庭淇さん（1930年生まれ、数え83歳）に集ってもらい、同席の形で話を聞いた。

### ① 鄭果花ヒアリング

#### 【羊摩寺惨案】

〔羊摩寺惨案については寿陽県志編纂委員会編『寿陽県志』（太原、山西人民出版社、1989年、460頁）で次ぎのように述べられている（なお県史では「陽摩寺」と記されている）。1941年1月1日夜、陽摩寺村民兵は八路軍19団と協力して、日本軍が寿陽から東郭湫の拠点を通して西岢村にいたる10余華里の電線を切断した。事件後、東郭湫拠点の密偵班長趙華と傀儡自衛団長侯志高が日本軍に密告した。1月5日、東郭湫拠点の日本軍と傀儡軍計200余人が漢奸趙華の案内で陽摩寺に向かい、早朝に村を包囲した。敵は会を開くという名目で、全村の男女老若全員を貯水池脇に集め、無残な大虐殺を行った。彼らはまず機関銃で掃射し、そのあと薪で焼いた。この場で殺害された人々は211名で、焼却家屋は116間、略奪された家畜80余頭、その他財産も略奪された。

1941年春、陽摩寺で殺害されていなかった民衆は村に帰って生産を続けた。日本

軍と漢奸が知った後、5月24日朝、自衛団が2次にわたって陽摩寺に行き、民衆と幹部8人を殺害した。

陽摩寺は全村110戸、人口330人であったのが、2度の虐殺で43戸が全滅し、219人が殺害された。]

鄭果花さんの母の鄭改壮さんは1918年生まれ。鄭さんは、この母から戦争当時の話を聞かされた。

鄭果花さんの親族が、1941年1月〔5日〕の羊摩寺の虐殺で被害にあった。鄭さんの母方の祖父は3人兄弟の長男。鄭果花さんの母方の外祖母の長兄の兄嫁（40歳代）が機銃で殺され、次兄の兄嫁は機銃掃射を受けたが穴に落ちて助かった。また、次兄の兄嫁の子どもは、「日本軍のためににわとりを取りに行く」とうそをついて逃げることができた。

事件の翌日、鄭果花さんの母は事件現場に行ったが、鄭果花さん自身は幼かったため、母から聞いたこと以外は事件については知らない。鄭果花さんは10代になってから、母から何度も何度もこの事件のことを聞かされた。話すときの母は、近い親戚が殺されたため、いつも泣きながら話し、子どもである鄭果花さんも一緒に涙を流した。鄭果花さんの母は日本軍を大変恨んでいた。そして、「殺された人たちがかわいそうだ」といって泣いていた。鄭果花さんが息子に戦争について話したことは少ないが、テレビで日本軍の残虐行為が放送されると、羊摩寺の虐殺の話を息子に話した。

## ② 鄭万喜ヒアリング

鄭万喜さんは河北省の出身だが、故郷が自然災害にあったため、数え4歳のときに人売り屋によってこの村に売られてきた。養家は女の子2人しかいなかったため、男の子がほしかったようだ。

### 【記憶の伝承】

鄭万喜さんは、老人たちがこの村付近一帯で日本軍が行った罪行について話しているのを聞いてきた。日本軍はこの村に入り、人を殺したり、家屋を燃やしたり、大きな被害をもたらした。老人の1人から聞いた話では村人が逃げたことに怒った日本兵が家屋を燃やし、食糧貯蔵用の木の桶の中に隠れていたおじいさんに対し、桶ごと火をつけて焼き殺したということだ。当時、養父は「車馬大店」という名の大きな旅館を運営していたが、すべて焼かれ、破壊されてしまった。

### 【身内の殺害】

鄭万喜さんの家族でも、伯父の16歳の養子が犠牲になった。伯父とその養子は、日本軍が来たことを知って村はずれまで逃げたが、伯父が小麦の袋を家に置いてきたことを思い出した。伯父は養子に袋を取りに行くように命じ、養子が村に戻ったところ日本兵に見つかり射撃された。養子は傷口から腸が出るほどの大けがをしていて、その晩に亡くなった。

### 【戦争被害後の生活苦】

家業の宿屋が破壊されたため生活が苦しくなり、養父は太原に出稼ぎに行って、最初はたばこやあめの行商、後にクズ鉄回収をして稼いだ。養父は出稼ぎに出て3年後に戻って来て、出稼ぎで稼いだ金で土地を買い、生活は楽になった。養父は太原が解放された1948年に村に戻ってきたが、翌年に死んだ。養父は、兄の子どもを殺されたこと、大切

な宿屋を焼かれたことで日本軍を大変恨んでいた。

#### 【記憶の伝承】

養母は女性の立場から日本軍の恐ろしさについて語ってくれた。日本軍が来ると若い女性はとても怖がって、山奥へ逃げた。逃げ切れないときには炭で顔を汚くして難を逃れようとしたそうである。養母の家族はこの村に長く住んでいたのので、情報を早く得て、日本軍が来ると素早く山へ逃げられたので無事だった。

鄭万喜さん自身も何度も子どもたちに戦争の話をした。テレビなどで鉄帽をかぶった日本軍の残虐行為が映ると、子どもたちの戦争の話をした。今でも放送されている戦争時代のテレビドラマは、あの時代のことをよく伝える内容だと鄭さんは思っている。

#### 【直接体験の記憶】

鄭万喜さん自身も、年は覚えていないが、日本兵の恐ろしい体験を覚えている。養父が太原に出稼ぎ中のある日、一人の日本兵が家に入って来て、物入れを開けて盗もうとした。養母は日本兵の足を掴み抵抗した。鄭万喜さんが泣き出したところ、日本兵は鄭万喜さんにビンタしたり、蹴ったりしたが、何も取らずに家から出て行った。養母にもけがはなかった。この時の怖い思いは今でも鮮明に覚えている。この時、家の外には日本兵の上官がやってきて、上官から集合の命令があったため、日本兵はあわてて集場所へ去って行ったようだった。鄭万喜さんは運が良かったと思っている。もし、上官が現われなかったら養母は銃剣で刺殺されただろうと思っている。

#### 【戦争被害後の生活苦】

養父が太原に出稼ぎ中は、畑は小作人を雇って耕作していた。それまでの食事は朝は粟ごはん、昼は豆麺をたべられたが、宿屋が焼かれた後はトウモロコシのスープのみの食事になってしまった。

#### 【今日における地域史の伝承】

2人の姉は運よく被害は免れたので、戦争のことを話すことはない。今の村の若者や子どもの中で、日本軍の被害について知っている人は少ない。今、村には幼稚園しかなく、小学校も大きな村の学校に集約されてしまったので、子どもたちに村の歴史について教育する機会がない。また、村に事件に関する碑などもなく、若い人々で戦争当時の惨事について知る人は少ない。

また解放後、鄭さんは西煙鎮の日本軍のトーチカで女性たちが性暴力を受けたことを聞いたことがある。この村からも含めて、村々の美しい女性がトーチカに連行され、不要になると捨てられたそう。女性が病気になったりすると日本軍は家族に取りに来るように伝え、家族がトーチカに迎えに行った。この村から連行された既婚女性のことを知っている。この女性はトーチカから生還することができたが、解放後もこの村で生活していて、鄭万喜さんは何度も見かけたことがある。連行された女性は、村内で夫の立場が弱く、メンツがない男性の妻の場合が多かったようだと語った。

### ③ 鄭庭淇ヒアリング

#### 【直接体験と伝聞】

この村に生まれ育った鄭庭淇さんは、日本軍が侵攻してきた時12歳くらいで、その後たびたび日本兵を見たことがある。村内で起こった虐殺事件の犠牲者には顔見知りも多

く、事件の話もよく聞いたので、事件についてはよく知っている。当時の鄭庭淇さんの家族は、父方祖父母、父母と鄭さんの小家族、また父の弟一家も含めた大家族で一緒の家に住んでいた。

### 【友好的だった日本軍】

鄭さん自身は3回日本軍に遭遇した。最初に来たのは、鄭さんが数え8歳か9歳の頃、1937年か38年の4～5月頃だった。村人が知らないうちに、村は保安隊を合わせて100人くらいの日本軍に包囲され、村人は逃げ出すことができなかった。この時の日本軍は誰も殺さず、むしろ子どもたちに友好的で飴までくれた。むしろ村人を味方にして、逃げ出すことのないようにしようとしているようだった。

### 【日本軍による掃蕩】

日本軍がこの村に2回目に来た時、村の大人たちは逃げ出し、村には女性と子どもだけしか残っていなかったため、日本兵は怒り、殺人や放火に及んだ。村人たちは村の西側の高地に見張りを立て、日本軍が来たら木を倒すことにして、村人に危険を知らせるようにしていた。この時は、こうした見張りの情報から、大人の男など身軽な村人たちは村から逃げ出した。村に入った日本軍は、村の公所に入り、50代半ばの鄭さん3番目の伯父＝「老三爺」である鄭九如を捕まえて、ドラを鳴らして村人を集めるよう命令した。この鄭九如は要求を拒んだため、2人の日本兵によって崖から突き落とされて殺された（死体は夜に見つかった）。その後、日本軍は、村の西の方に見張りがあったことから、「西の高台の家は八路軍に利用されやすい」と理由を付けて、村の西方の民家を全て放火し、破壊し、殺人もした。村内で殺人があったので、村の北側と南側へ逃げたいいずれも20代の若者が、村内に残った村人に「早く逃げろ」と警告したところ、日本兵はこの若者たちを射撃した。日本兵は射撃が上手く、2人とも射殺された。殺されたのは黒小・二洵と言われる2人の若者だった。殺された後、鄭さんも遺体を見た。遺体は家族が村に運んで葬った。この時の討伐では、他に、食糧桶に隠れていて焼き殺された人、食糧貯蔵穴に隠れていて見つかって殺された人もいた。また100戸以上が焼かれたが、鄭庭淇さん宅は焼かれなかった。当時の鄭庭淇さん宅は村の南方の赤泥溝というところであり、おもに焼かれたのは村の西側の村だったので燃やされなかった。日本軍に火をつけられた家でも、日本軍撤退後に戻ってきた村人によって鎮火された家もあった。夜に村に戻った鄭さん一家は、崖から突き落とされて殺された伯父の鄭九如を埋葬した。貧しかったので棺を買うことができず、古い布団にくるんで埋葬した。ただ鄭庭淇さん一家は日本軍が再び来襲することを恐れて、埋葬後はすぐに逃げた。

この掃蕩作戦の背景には、以下のような事情があった。この村の南方の南溝という所に共産党の7区公所が置かれていて、この村にも工作隊のグループが組織されていた。当日の未明の暗いうちに、共産党の通信人の鄭梅保が手紙を服の中に隠して歩いていたところ、日本兵に見つかって身体検査をされた。隠し持っていた手紙は、緊急の用件を意味する鳥の羽がついていたため、鄭梅保は日本兵に殴られ、共産党組織のある場所を白状させられた。その後、日本軍は南溝の共産党組織のあったヤオトンに包囲し、機銃を撃って、投降するよう呼びかけた。ヤオトンの中には、共産党員の黄区长と李建平がおり、李は1発のみ弾が撃てる銃で抵抗したが、日本軍の機銃によって射殺された。黄区长は南煙の日本軍のトーチカに連行されたが、共産党が銀元を払ったので釈放された。

黄区長は解放後は河南省に転勤となったが、鄭さんもこの黄区長と顔を合わせたこともあった。

3回目に日本軍が来たのは、羊摩寺の虐殺事件後だったが、日本軍はこの村に立ち寄っただけで、この村では何もしなかった。

#### 【記憶の伝承】

村外の虐殺事件について鄭さんは、羊摩寺の虐殺事件については伝え聞いたが、その他については知らない。また、子どもの頃、満州事変や盧溝橋事件などについて大人から聞いたことがあり、日本軍の噂についても聞いていた。日本軍の士官はアヘンの密貿易などもしていたようだと言った。鄭さんは「桃」「さようなら」「ありがとうございます」などの日本語を今でも覚えている。

#### 【八路軍のイメージ】

鄭さんは1人っ子だったので八路軍への入隊を求められたことはなかった。鄭さんには、八路軍の武器は貧弱に見えた。日本降伏後、八路軍は日本軍が置いていった武器を用いたので強くなった。手榴弾も、八路軍のものより、日本軍のものが強力だった。

### 4. 8月20日ヒアリング

8月20日は、午前中に寿陽県羊頭崖郷羊頭崖村を訪れた。ここでの聞き取り調査は張先生の手配によるのではなく、いわゆる飛び込みで行った。すなわち我々が村に着いた後、通訳を担当いただいた山西大学の趙先生が、羊頭崖の事件について知っている人を探し出す形で、聞き取りを行ったのである。

#### ① 趙悞毛ヒアリング

まず話を聞いたのが趙悞毛さん（男性、1932年旧暦9月26日生まれ、数え81歳）であった。

#### 【記憶の伝承】

羊頭崖村の惨があった1939年〔正しくは1940年〕8月19日は、趙さんは数え8歳だったため実際に見てはいない。伝聞によって事件を知っている。

#### 【韓贈惨案と羊頭崖惨案】

〔韓贈惨案については『寿陽県志』（458頁）で次のように述べられている。1940年8月6日午前、女漢奸でゴロツキの王秀苗が日本軍に密告し、韓贈村の人々が「通匪」していると誣告した。盧家庄に駐屯する日本軍の「三太君」は40人余の日本軍を引き連れて韓贈村に出発し、韓贈村の人々に残忍きわまりない大虐殺を行った。

獣兵〔日本兵〕が行くところ鶏が飛び犬が吠え、彼らは門を見つければ入っていき、人を見れば殺した。当時、全村で98戸あったが、39戸は皆殺しにあった。この日中国共産党員9人、村の幹部4人、民衆351人（村外の民衆36人含む）、計364人が殺害された。血なまぐさい大虐殺後、放火がなされた。多くの家屋、戸や窓、家産が焼き払われた。韓贈村には死体が散乱し、硝煙がびまんし、火の海と化し、持ち去ることが可能な者はすべて略奪された。午後、中国人の血に両手を染めた野獸たちは、盧家庄に帰る途中、韓贈村の6名の民衆に出くわし、6人は逃げ切れずに路上で全員殺害された。全県をぞっとさせた韓贈“8・6”大惨案を生み出した。〕

〔羊頭崖惨案については、『寿陽県志』(460頁)で次のように述べられている。1940年9月19日(農曆8月18日)朝、冀家埡と盧家庄2ヵ所の拠点の日本軍と警備隊が、日本軍隊長増春と江湖の指導下、二手に分かれて羊頭崖に来襲した。9時頃、冀家埡の敵がまず村に進んでいき、会議の名目で1軒1軒に声をかけて人を集めた、敵は捕まえてきた群衆をすべて村の中の廟に集中した。盧家庄の日本軍が来るのを待った後、凄惨な大虐殺が始められた。廟の4方にすえられたいくつもの機関銃の銃声のあと、上は7、80歳の老人から、下は乳飲み子まで、198名全部が血の海に倒れた。獣兵たちはそれでも満足せず、火を放って全村の家屋を焼き払った。当時羊頭崖には盧家庄で仕事をしていた民工18人もいたが盧家庄拠点の日本軍に全部殺された。この惨案で日本軍は216人を殺害し、そのうち20戸が一家全滅で、最も多いのは1戸9人全員が難にあった。焼却された家屋は200間余であった。〕

虐殺は、日本軍のトーチカがあった盧家莊へと続く電線が破壊されたことが原因で起こった。電線を壊されて怒った盧家庄トーチカの日本軍が怒り、周囲の42ヵ村の村長を盧家庄に集めた。村長のうちの1人が、韓贈村の村長に、「お前の村に美しい女性がいる。その女性に頼んで、日本軍の相手をしてもらうことで、我々が解放されるようにできないか」との話もしたが、韓贈の隣村の村長は断った。その後、8月8日に韓贈村で虐殺事件が起きた〔県志では8月6日とされているが、地元では8月8日とされている〕。

羊頭崖村と韓贈村以外の40ヵ村は日本軍を恐れて、日本軍に情報と物品、お金を与えたために許されたが、日本軍に何も渡さなかった2村が討伐を受けた。旧暦8月8〔6〕日に王秀苗の出身地の韓贈村が、同8月19〔18〕日に羊頭崖が討伐を受けた。羊頭崖村では、日本軍に協力していた韓贈隣村在住の女性漢奸である王秀苗を通じて日本軍にお金を渡すことで難を逃れようとしたのだが、日本軍は「他の40村は金品をよこしたが、お前たちはなぜ持って来ないのか」と言っていたことから、王秀苗が着服していたことが判明した。

日本軍は以前から村を通りかかることが多かったので、事件の日の旧暦8月19〔18〕日にも虐殺が起こるとは思わなかった。ただこの日は、盧家庄、冀家庄、羊頭崖より西方の皇角村の3つのトーチカの日本軍が村を包囲した。日本軍は突然村に侵入し、1人の男性の老人に命じて、ドラを鳴らさせ、「会議をはじめると」と触れまわらせた。ただこの老人は「今日の会議はいつもと違う」と付言したので、頭の良い村人は、いつもと違い大変なことが起こると思い、村から逃げ出した。考えの及ばない人たちは、逆に好奇心をもって集まった結果、殺されることになった。当時の村は約200戸、人口800人以上だったが、日本軍は村内だけでなく村の周辺でも見つけた村人を殺害したので、殺された人は300人位になったと言われている。

村内にいた人たちはお寺に集められた。そこで日本軍は、まず村長を銃殺し、その後、寺の庭に集められた人たちを機関銃掃射し、その後、1人ひとり銃剣で刺し、火をつけて燃やした。現在村に住んでいる趙通宝という人の母方の祖母にあたる女性1人が、虐殺現場から生還した。この女性は機関銃の弾に当たることなく、周囲の死体の腸を体に巻きつけることで銃剣で刺されなかった。彼女は、日本軍が寺から退去した後に虐殺現場から脱出することができた。

生き残った村人たちは、日本軍の話す言葉が分からず、何に怒っているのかはよく分



からなかったが、おそらく電線が破壊されたことへの報復であろうと相談した。そこで、蔣奮武という人を新しい村長に選び、蔣村長は盧家荘の日本軍トーチカへ行って、日本軍への協力を約束した。村人たちの中には日本軍への協力を嫌がる人も多かったが、蔣村長は食糧 300 石を日本軍のトーチカに持参し、その後も村の畑に栽培する作物について日本軍からの指示に従い、収穫期には収穫の一部を馬車でトーチカに運ぶと約束をした。ただ、収穫期になると村長は、村人に命じて山の上に放火させ、「八路軍に食糧を奪われた」と日本軍に報告し、実際に食糧をトーチカに持っていくことはしなかった。

#### 【戦後に問題化した対日協力】

解放後の 1950 年代、この蔣村長に対して村人から、日本軍に 300 石の食糧を提供した日本軍の協力者である、という訴えも出されたが、蔣村長は八路軍の区長に頼んで実際には日本軍に協力していないという証明書を書いてもらい、罪に問われることはなかった。

#### 【記憶の伝承】

当時の趙愣毛さん一家は、羊頭崖村内の家とともに、村から 1 キロほど山の上にあった柳家坪という小さな村にも家を持っていた。もともと趙さん一家は柳家坪に住んでいたのだが、趙さんが 5 歳の時、父が 21 石の米で 20 畝の土地を羊頭厓村に買い、家も建てた。趙さん一家は農作業の状況に応じて 2 つの家を使い分けていたが、事件の頃は収穫期だったので、一家は柳家坪に住んでいたこの村にはおらず、事件に巻き込まれなかった。ただ、羊頭崖村にあった趙さんの家は 6～7 間が燃やされ、祖父の兄弟が 1 人、事件で犠牲になった。趙さん一家は、事件当日の午後、羊頭斗厓村の村人の大人たちから虐殺事件について聞いた。

#### 【討伐の逆説的効果】

事件前から趙愣毛さんは、盧家庄と冀家庄のトーチカの間を移動する日本軍を見かける機会が多かった。また日本兵が羊頭崖村で部隊の配置替えをする光景をよく見ていたし、村人たちも日本兵の配置替えに協力していたので、この村の村人が日本軍から殺される事件が起こるには思っていなかった。村人は貧しかったので、日本兵は趙さんたち子どもたちに飴などをくれることもあった。したがってこの村では、大人の男性は日本軍を警戒していたが、女性や子どもの多くは日本兵を恐れておらず、事件の日も女性と子どもは大丈夫だと思って寺に集まって、多くの犠牲者が出た。

虐殺事件後、18 歳以上の男の村人たちは日本軍を恐れるようになった。日本軍からは、八路軍の情報を提供をするように命令が出たが、男たちは日本軍に接しないようにしていた。女性や子どもは事件後も日本軍を怖がらずに、事件以前と同様に日本兵と付き合った。

#### 【戦後の状況】

解放後、漢奸の王秀苗は文化大革命下の反革命鎮圧運動の下、出身の村で処刑されたと聞いた。なお解放後、趙さんの父の趙二成さんは、37 歳の時に入党した共産党の地下黨員だったことを知った。解放後、共産党の正式な会議で党幹部からの報告で父が黨員だとはじめて知ったが、それまで家族は誰も知らなかった。解放後の農地改革で、家族の所有地は国の農業社（人民公社）に無償で引き渡した。農具と羊、牛については、農業社に有償でお金を支払うことで私有が認められた。

## ② 王治国ヒアリング

8月20日の午後は同じく羊頭崖村で、王治国さん（男性、1950年生まれ、数え63歳）の話を聞いた。

### 【記憶の伝承】

王治国さんはこの羊頭崖村に生まれ育ち、父母や周りの大人たちから戦争当時の体験を聞いており、戦争時代のことをよく知る人物である。王さんはまずはじめに「この羊頭崖村の惨事について知ることは皆にとって責任があること。日本から皆さんが来てくれたことを歓迎します。皆さんに協力し、皆さんの研究に役立ちたい」とあいさつした。

### 【羊頭崖惨案】

1940年9月19日（旧暦8月18日）の虐殺事件は、地元では「羊頭崖8.18.惨案」と言われているが、晋中地区及び寿陽県内で起こった虐殺事件のうち最も被害が大きいものだった。当時の羊頭崖村は約200戸、人口500人ほどだった。この村では家族の人数は少なく、独身男性も多かった。事件の場所はこの村内の千仏寺という寺の境内である。1940年9月19日の午前9時頃、冀家庄分遣隊の日本軍が村に侵入し、会議を開くという名目で村人を千仏寺に集めた。会議に行かず、村外に逃げようとした村人も20人位が殺された。日本軍は増晴和江という名の隊長に率いられた20数名の部隊だった。さらに午前10時頃、盧家庄から江戸という名の上官が増援部隊を引き連れて来た。日本兵たちは軍服、軍帽、小銃で武装し、機銃もあり、軍犬を何匹も連れていた。

日本軍は、集まって来た村人を千仏寺の庭に集め、寺の入口に機関銃を置き、庭の周囲の壁の上でも日本兵が銃を持って警戒していた。日本兵たちはほとんど何も語らず、村長を殺し、江戸という名の盧家庄の隊長の命令で庭に集められた人たちを機銃掃射し、壁の上の兵隊も上から小銃で射撃した。30分ほど経った後、日本兵たちは庭にいた村人1人1人を確認し、生きている人を銃殺した。生存者は2人のみで、1人は小さな子どもで、庭の隅に隠れていて、その後は寺の提灯の中に隠れて助かった。もう1人は王醜さんだった。日本軍は、村人の死亡を確認した後、死体にガソリンをかけて燃やした。生き残った王醜さんは、死体の腸を体に巻きつけ死んだふりをしていた。日本兵は機銃掃射後に1人1人銃剣で刺して生死を確認していたが、死んだふりをしていた王醜さんは刺されなかった。さらにガソリンが王醜さんの体に届かず、焼けなくてすんだ。80歳代の老人から、母に抱かれたままの乳飲み子まで無差別に殺害された。寺の庭の地面は血まみれになって無残だった。日本軍撤退後、村人たちは家族の遺体を捜したが、大半の人は真っ黒に焼けていて判別できなかった。

日本軍は午後4時頃、盧家庄と冀家庄のそれぞれのトーチカに戻って行った。日本軍は撤退中に石嘴村というところで、日本軍のためのトーチカづくりに動員されていた小作人や出稼人たちを見かけたが、そのうち良民証から羊頭崖村民だと分かった18人を即時射殺した。この事件で殺されたのは、千仏寺で殺された198人、石嘴村殺された18人の合計216人ほどだと聞いている。20の家族は、一家全員が犠牲になったが、このうち9人全員が殺された家族が一番大きな犠牲だった。

### 【記憶の伝承】

この事件の原因について、歴史資料や証言からまとめると、つぎのみつつの要因があると思う。①盧家庄と冀家庄に駐屯する日本軍がこの村を通過中に配置換えを行ったが、

その際に村人への略奪・暴力があったのに憤った村人が日本軍の鉄道や電線を破壊したため、それへの報復。②1940年8月20日に百团大戦が起こり、石家庄から太原までの重要ルートにあたる鉄道線の損害が大きかったため、日本軍がすぐに報復戦を行い、鉄道周辺の村が討伐されたこと。③羊頭崖村にあった、日本軍への協力組織であった維新会は口先では「食糧や馬を提供する」と言いながら実際に提供しなかったため、日本軍が怒ったこと。

王治国さんの虐殺事件についての知識は、年上の人たちから聞いて得たものが中心である。県史にも記録はあるが、具体的な話は親世代の人たちから聞いた。王さんたちが子どもの頃、大人たちが集まるといつも虐殺事件の話をした。老人たちは、話しながら涙を流していた。王さん自身の父母は無事だったが、王一族の中に殺された人もいた。現在80歳代以上の人たちは、事件の後処理をした経験があるので、涙ながらに王さんたちに事件の様子を話してくれた。

#### 【遺体処理】

死体処理については村長も殺害されたので、村人たちは自発的に行い、顔や体から身元判明した人は家族が埋葬し、判別できない死体や一人暮らしだった人、全滅した一家の遺体は一緒に山の上に集団埋葬した。

#### 【烈士塔】

千仏寺には1946年8月に烈士塔が建立されたが、虐殺事件とは無関係で、解放後に路南県政府が解放戦争での八路軍戦死者のために立てたものである。戦時中はこの塔はなく、その代わりに門があって、鐘楼があった。

#### 【記憶の伝承】

現在、村の若い人たちに対しては、毎年4月5日の清明節の行事の中で、元八路軍兵士や村の古老から戦争や虐殺事件についての話をする機会が作られている。また、烈士塔があり山西省の愛国教育の一つの拠点になっていることから、周辺の小中学生などが集まって話を聞くこともある。学校では、現場での証言や学校での講演会など、革命烈士をまつる行事を毎年行っている。また、毎年墓祭りとして、白い花を塔に捧げている。村の小中学生には毎年、村で起こった虐殺事件について話を聞く機会が設けられている。今の村の若者たちは、戦争のことについて関心を持つ人もいるが、遠い昔の話なので無関心な人も多い。王さんの世代の人たちは、生き証人である年上の人たちから直接話を聞いており、親戚で殺された人もいるので事件の話が心に強く残っている。ただ、今の1980～90年代生まれの若者たちは、王さんたちから話を聞いてもあまり感動しないのではないか、と王さんは思っている。

#### 【漢奸】

女性の漢奸の王秀苗について、この人は美人で、盧家庄に住みつき、トーチカの江戸隊長の妾として男女の関係になっていたようだ。戦争当時18歳～20代の王秀苗は韓贈村出身で、美貌なので日本軍に取り入って贅沢をしていたと言われていたが、当初は自ら進んで日本軍に接近していたわけではなかったようだ。日本軍は、維新会を通じて村々に若い女性の提供を要求し、選ばれた女性たちがトーチカに連行されていた。王秀苗の場合も本意は分からないが、美人だったので日本軍に半ば強制的に連行され、漢奸になってしまったのが実情ではないかと思われる。このように、誰も好きで漢奸になったわけ

ではなく、彼らも戦争の被害者である。ただ、韓贈村の虐殺事件は王秀苗と直接関係があると言われている。王秀苗は、自分の出身地である韓贈村の人たちに日本軍と男女の関係になったと悪口を言われたため、それに対する報復の気持ちから虐殺事件につながったと言われている。なお解放後、王秀苗は太原に逃げ、隠れ住んでいたが、文革期の1966年に太原で発見され、韓贈村に連れて来られて殺された。王秀苗は殺された時は50歳近かったが、体つきも立派で美しい女性だった。解放後には、漢奸については国を裏切った犯罪者としてとても厳しく評価された。戦犯は戦闘行為だから仕方がないが、漢奸は国が大変な時に自分の意志で国を裏切った者なので戦犯以上に悪いと言われている。

### 【抗日戦争】

この村にも八路軍は来たが、主にゲリラ戦を展開する民兵が中心だった。百団大戦の時も、この地域から県志願民兵大隊に加わった人もいたが、八路軍の正規軍はいなかったようだ。こうした民兵は、武器も槍や刀、鍬などが中心で、軍事訓練も受けていない自発的な組織で、戦闘よりも、鉄道など日本軍側の建設物の破壊を主体に活動した。こうした鉄道・道路・電線の破壊などに活動は、共産党の地下組織が主導して進められた。なお、羊頭崖村にも1938年から共産党の地下組織が置かれ、さまざまな活動を展開するようになったが、地下黨員なので夫婦間でも黨員であることを秘密にしていたこともあったようだ。民兵は主に山の上で活動し、日本軍が来襲すると、山の奥やほら穴に逃げた。百団大戦の後、1941～42年頃から、八路軍が日本軍から奪った武器を民兵に渡したりして武器も充実するようになり、民兵の戦闘能力が強化された。こうして戦闘能力を強化した民兵は、1941～42年以後は日本軍の討伐に対して反撃する「反討伐」を行うようになった。なお、伝聞によると、日本軍は射撃が上手で、飛ぶ鳥や泳いでいる魚も1発で仕留めることができたようだ。日本軍のトーチカがあった盧家庄には、銃眼の跡が残るトーチカや兵隊の宿舎の跡、川にダムを造って山上に水を引いた施設の跡が残っている。

### 【記憶の伝承】

王さんは歴史に興味があったので、寿陽県で起こった虐殺事件について、羊摩寺の惨案〔1941年1月5日〕、王村の惨案〔1940年農曆8月20日〕、堆兒梁の惨案〔1943年〕、范瑤の惨案〔1940年9月4日〕など、県史に書かれている事件については本で読んだり、老人から話を聞いたりしてよく知っている。羊頭崖村では、60歳代の人たちの中には、親が殺されたという人もいるが、70歳近くなっているのも、最近では数が減ってきている。この村で82歳位の老人で、事件についてよく知っている人がいる〔午前話を聞いた趙楞毛さんのことと思われる〕。

同じように虐殺事件の起こった韓贈村には、国によって「8.8.遭難碑」が建立された。羊頭崖村でも一時、碑を建てる話が持ち上がったが中止になったので、いつか実現し、若い世代に伝える歴史の証拠としたい。

## II. 戦争の記憶

今回の聞き取り調査では、戦時中の日本軍による戦争被害について話者にまず自由に話してもらい、必要に応じて質問をして、確認・捕捉をした。また今回の調査では、戦争の記憶がどのように蓄積され、継承されてきたのかを一つのポイントとしたので、その点については各話者に質問をしている。

上記の聞き取り内容からまず言えることは、80代の方たちが今なおかなり鮮明に当時の状況を記憶しているということである。話しをする際も、一生懸命に思い出して話すというのではなく、皆よどみなく話しをしていた。特に惨案体験について語ってくれた人たちはほとんどがその体験をことあるたびに思い出したり、家族や身近な人々に語って聞かせてきたと答えている。このような思い起こしにより個人の中で記憶は固定化され、また体験者同士の語り合いや体験者による話聞かせの積み重ねによって同世代間や世代を超えての記憶の共有が図られてきたことが窺われる。

今回羊頭崖村で話を聞いた王治国さんは戦後生まれの63歳であったが、地方史の本で知った以外に、老人たちからよく話をきいたと答えた。また王さんによれば、羊頭崖惨案については清明節に元八路軍兵士や村の古老から戦争や虐殺事件についての話をする機会が作られており、愛国教育として学校でも小中学生に話がなされているという。

ただ王さんが1980～90年代生まれの若者たちは、王さんたちから話を聞いてもあまり感動しないのではないかと、戦争の記憶が若者に十分浸透しなくなっている状況についても言及した。鄭万喜さんも今の村の若者や子どもに対して村の歴史について教育する機会はないし、村には事件に関する碑などもないため、若い人で日本軍の被害について知っている人は少ないと語った。

惨案の記念碑は、理由はわからないが、作られたところと作られていないところがあるようで、多少地域差があるといえよう。

すでに紹介したように被害状況についての記憶はかなり具体的である。日付や被害者数などについては県志の記述などと食い違いがときおり見受けられるが、被害者数などについては県志の記述が誤っているとの発言もあり、必ずしも記憶が曖昧ということではないようである。

今回話を聞いたのはほんの数人であったが、日本軍の侵攻を受けた地域の様相について興味深い話をいろいろ聞くことができた。日本軍の兵士を始めて目にしたときの様子、日本軍が接近してきたのを山の上に設置した目印の木を倒して知らせる様子、日本軍に接したときに接待しようとした様子、日本軍の接近を知って財産を持ち、家畜を引き連れて山中に避難する様子、日本軍は射撃がうまいと見られていたこと、避難中の苦しい生活の様子、肉親が日本軍に暴行を受けたときの様子、惨案後でも女性や子供が日本兵を怖がらずに接した様子、日本軍に虐殺された肉親の遺体の捜索・遺体との対面・埋葬の様子、近隣の被害が口コミで伝わった様子、日本軍により無人区化された村とその村に住民が復帰していく様子、八路軍は歓迎されていたが、武器が貧弱だと見られていたこと、日本軍と漢奸の関係、戦後における漢奸処罰、戦争被害によって戦後にも続いた苦しい生活の様子などなど。このような記憶が山西の大地の上でまだなまなましく息づいていることを肌身に感じた調査であった。

(付記) 本稿は2012年度都留文科大学大学院共同研究費(伊香・村上)および都留文科大学学術研究費(村上)による研究の一部である。本稿のもとになったヒアリングは、伊香が主な質問者となって行われた。本稿はそのヒアリングのテープ起こしを村上と高が行ったものを基に、伊香が全体を執筆したものであり、文章の最終的な責任は伊香が負うものである。また趙金貴先生を紹介いただいた大東文化大学の内田知行先生、趙金貴先生、張双兵先生、聞き取りに応じてくださった皆さんにこの場を借りてお礼申し上げます。

- (1) この調査の成果に関わりが深い研究として石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力 大娘たちの戦争は終わらない』(創土社、2004年)がある。日中戦争期の孟県の状況については加藤修弘「証言解説 大娘たちの村を襲った戦争—孟県の農村から見る日本軍の相貌」(同書所収)が詳細に述べているので、参照されたい。また大森典子『歴史の事実と向き合っ—中国人「慰安婦」被害者とともに』(新日本出版社、2008年)は調査の経緯やその後の山西省性暴力にかかわる戦後補償裁判について述べたものである。
- (2) 張双兵先生の孟県を中心とした戦争被害調査への取り組みについては前掲大森書でも紹介されている。また張先生がおこなった聞き取り調査の成果については、張双兵『炮楼里的女性 山西日軍性奴隷調査実録』(江蘇人民出版社、2011年)にまとめられている。